

# 花袋氏を見舞ふ

徳田秋声

…一…

去年の暮花袋氏が脳溢血で倒れたとき、私は佐多病院に氏を見舞うつもりで、途中ちよつと中央公論社で用事をすまし、社長の島中氏も一緒に見舞おうというので、同伴で同病院を訪れたことは、今尚記憶に新たで、それから二月たらずで退院し、日ましに快方のことと思つていたので、今頃その花袋氏が喉頭がんにかかつたと聞いても、ちよつと信ずる気にはなれなかつた。会う人毎に聞いてみても、確たしかなことを知つているものがない。気にはかけながら、多分何かの誤聞だろうくらいに思つていた。四五日前久しぶりで中央公論社に用事があつて行つたので、島中氏にも実否をただしてみたところ、長与博士などが診察した結果がانشゅときまつたことは事実だということだった。私は少し驚いた。がんという奴は、多くの病気のなかでもつとも不愉快なものの一つである。紅葉先生も三十六や七の壮年でがんのために倒れてしまつたのだし、明治文壇の先駆山田美妙齋氏もまた食道がんのために死んだ。私の兄や甥などもがんでやられた。かつて私は順天堂で佐藤博士にぢろうの手術を受けたとき、運ば

ん車で手術室の控室へ運ばれると、ちよつど舌が何か何かの大手術中で、齒をぬいて、骨をのこぎりでひいていゝという大変なところを見せられたこともあるし、又その時入院中、遊三という落語家が三度も舌がんの手術をして、段々舌つたらずになつた話なども聞いたし、その他私は四五年前までは、大抵年に二回三回は胃腸で吉光寺博士などの診察を受けたものなので、田舎から博士の診察を受けに来た人のなかで、博士の診察ぶり、てつきりそれががんだとおもわれる、哀れな患者などを見受けたこともある。甥の大学病院入院中、私は毎日かかさず見舞つて、色々のがんしゅ患者の悩みをも目撃したこともある。最近の医師が非常に進歩して来たことは事実らしい。しかもがんしゅは今尚我々の恐怖中の恐怖である。がんの研究は日本の医学界では可なり進歩しているらしい。あるいは日本ががんの治療において、医学界のしよ光たらんとしているかの形もある。しかも今は尚その道程にあるに過ぎない。がんが難病中の難病として人に忌まれてゐるとは、悪い親爺のことを、あれはおれの家のがんだと、いい、閣員のなかに難物があれば、あれは今度の内閣のがんだというしやれがあるのでも分かる。がん何ぞ容易ならんやである。私が驚いたのも無理はないのである。しか

し花袋氏に会ってみて、私はやや安心した。それは氏の喉頭がんの発生が去冬の脳溢血よりも一年も二年も前で、咽喉のはれを気にしながら、さして苦にもならず、ずっと健康で過ごして来たのである。それに医師の綿密な診察の結果、がんはがんでも至極質の良い方なので、ラヂウムで散らすことも左程困難ではないというのだそうである。胃がんの宣告を受けた人で、いえた人もまたすこぶる多い。中には誤診もあるに違いない。がんの誤診は私の耳に入ったものだけでも相当に多い。曾てある婦人科の博士の母堂が、その在住地の京都で、博士の友人である博士達からがんの宣告を受けた。いざ東京で手術を受けるとなつて、念のため青山博士の診察を受けさせて見たというので、青山博士に見てもらつたところ、青山博士はげんな顔をして、がんは一体どこにあるんだ。もつとも腎臓が少し悪いが、海岸へでも転地して牛乳でも飲んではばなおるといわれ、その通りにしたところ、日増しに健康体となり今尚健在だということである。これは四五年前にきいた名医青山博士の逸話の一つである。私は花袋氏のがんが誤診でないまでも、どうか軽微で、一日も早く快ゆされんことを祈つてやまない。

※本文の表記は、できるかぎり常用漢字・新かな遣いに改めたが、表現上改めていない箇所もある。

※出典 当館所蔵 田山家資料新聞切抜帳より

(記事は「東京朝日新聞」昭和4年7月16日から28日まで連載したもの)